

ヒンドゥー教における Bhakti

加藤 智見

基礎教育課程

On Bhakti in Hinduism

KATO Chiken

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 12, 2002; Accepted January 18, 2003)

はじめに

私は現在、宗教における信仰の本質を究明するため、世界の主要な宗教におけるさまざまな信仰について検討を重ねているが、本稿においてはヒンドゥー教における信仰、特に Bhakti の意味を究明してみたい。

Bhakti については、「誠信」¹⁾「献身的愛」²⁾「信愛」³⁾などと邦訳されているが、この Bhakti についてまずは『バガヴァッド・ギーター』(Bhagavad Gītā) における Bhakti を、次にヴィヴェーカーナンダ (Swami Vivekananda) における Bhakti の意味を検討し、ヒンドゥー教における信仰の特質の一端を導出してみたいと思う。

1. 『バガヴァッド・ギーター』における Bhakti

『バガヴァッド・ギーター』は、インドの大叙事詩『マハーバーラタ』(Mahābhārata) 第六巻の一部を構成する全十八章七百頌からなるものであり、世紀前二世紀頃に成立、世紀後になって原形のようにまとめられ、この書に編入されたとされている。「後代のヒンドゥー教徒はこれを最上の聖典として尊崇している。もしも、〈インド精神〉を表現するただ一冊の書を挙げよ、と言われるならば、それは『バガヴァッド・ギーター』であるといわれる」⁴⁾と指摘されるように、ヒンドゥー教の信仰の特質を考察するためには重要な書物であると考えられる。

この書の概要は次のようなものである。肉親同士が殺し合う戦いをためらったアルジュナ (Arjuna) は、苦しい気持ちを御者のクリシュナ (Kṛṣṇa、実は最高神ヴィシュヌの権化) に次のように訴える。「ああ、我々は何という大罪を犯そうと決意したことか。王権の幸せを貪り求めて、親族を殺そうと企てるとは」(Aho bata mahat pāpam kartum vyavasitā vayam yad rājya-sukha-lobhena

hantum svajanam udyatāḥ)⁵⁾。これに対してクリシュナはアルジュナを励まし、「もしあなたが、この義務に基づく戦いを行わなければ、自己の義務と名誉とを捨て、罪悪を得るであろう」(Atha cet tvam imam dharmyam samgrāmaṁ na kariṣyasi tataḥ svadharmaṁ kirtim ca hitvā pāpam avāpsyasi)⁶⁾ とうたう。このクリシュナの言葉を聞き、アルジュナは戦いの意味を一応は理解するのであるが、なお煩悶は残る。そこでクリシュナは最高神ヴィシュヌの信仰による救いを説くこととなるが、実はこの信仰が Bhakti である。以下、この Bhakti についての叙述をさまざまな側面から分析、検討してみたい。

(1) Bhakti の使用法

まず Bhakti という言葉がどのように使用されているかを見ておきたい。

①<ひたむきなもの>「しかし、それはひたむきな信愛により、このような私を真に知り、見て、私に入ることができる。アルジュナよ」(Bhaktiā tv' ananyayā śakya aham evam-vidho'rjuna / jñātum draṣṭum ca tattvena praveṣṭum ca paramtapa)⁷⁾。この「私」とは神のことであるが、神への信愛は「ひたむきな」(ananyayā) ものであると言う。このほかにも「ひたすらな」「専一な」といった形容詞が Bhakti につけられる。このようにひたむきに信愛すれば神を「知り」「見ることができ」神に「入る」(praveṣṭum) ことができるというのである。なお神に入るということは、神と一体化することであり、したがってこの点でキリスト教やイスラム教の信仰との相違も見られるであろう。

②<智慧と表裏したもの>「アルジュナよ、四種の善行者が私を信愛する。すなわち、悩める人、知識を求め人、利益を求める人、知識ある人である」(Caturvidhā bhajante mām janāḥ sukṛtino'rjuna / ārto jijñāsuraḥ hārthi jñāni ca bharata'rṣabha)⁸⁾。悩む人、神を知りたい

と思っている人、何かの利益を求める人、神について学んでいる人、それぞれ立場は異なっても神を求め、神を信愛しようとしている人々がいるというのであるが、次の点に注意したい。「彼らのうち、常に〔私に〕専心し、ひたむきな信愛を抱く、知識ある人が優れている。知識ある人にとっては私はこの上なく愛しく、私にとって彼は愛しいから」(Teṣāṁ jñāni nitya-yukta eka-bhaktir viśiṣyate / priyo hi jñānino'tyartham ahaṁ sa ca mama priyaḥ)⁹⁾。重要な点は、Bhakti といっても決して狂信的な信仰でも盲目的な信仰でもないということである。冷静な知識のあることが大切であり、究極においては知ることと信愛することが別のことでなく、知ることが信愛することであり、信愛することが知ることにもなる点である。たしかに Bhakti は「ひたむきな」ものではあっても盲目的なものではなく、冷静な知識（私としてはこれを「智慧」としたい）と表裏したものであることに注意をしておきたい。

③<強固な信念をもつ>「しかし、善行の人々の罪悪が尽きる時、彼らは相對観の迷妄を脱し、強固な信念をもって私を信愛する」(Yeṣāṁ tv anta-gataṁ pāpaṁ janānāṁ puṇya-karmanām / te dvandva-moha-nirmuktā bhajante mām drdha-vrataḥ)¹⁰⁾。ギーターの言う信愛は、ただ熱く燃え上ったり、一時的であったりするものではなく、強固な信念をもったものであり、不動の信念によって保たれるものである。「常に満足し、自己を制御し、決意も堅く、私に意と知性を捧げ、私を信愛するヨーギン、彼は私にとって愛しい」(santuṣṭaḥ satataṁ yogi yat'ātmā drdha-niścayaḥ / mayy arpita-mano-buddhir yo mad-bhaktaḥ sa me priyaḥ)¹¹⁾。自己を失うような冷静さを欠いた衝動的なものでもなく、しっかりと自己を制御し、「強固な信念をもつ」「堅い決意に基づいた」ものである。

④<清浄なもの>「何ごととも期待せず、清浄で有能、中立を守り、動揺を離れ、すべての企図を捨て、私を信愛する人、彼は私にとって愛しい」(Anapekṣaḥ śucir dakṣa udāsino gata-vyathaḥ / sarvārambha-parityāgi yo mad-bhaktaḥ sa me priyaḥ)¹²⁾。信愛するという信仰形態には「清浄な心で」信愛するという特色も見られる。何事かを期待すれば欲望がからむ。中立を守るためには執着心があってはならない。動揺を離れるには心の静かさがなければならない。企図を捨てるためには無欲で清浄な心をもたなければならない。清らかな信仰は集中力を生み、有能な行為を生み出すことになるだろう。清浄で無垢な心によって信愛は純粋になり、深まっていく。

⑤<心が確定する>「毀誉褒貶を等しく見て、沈黙し、いかなるものにも満足し、住処なく、心が確定し、信愛に満ちた人、彼は私にとって愛しい」(Tulya-nindā-stutir

mauni saṁtuṣṭo yena kenacit / aniketah sthira-matir bhaktimān me priyo narah)¹³⁾。執着心を去れば人を平等に見ることができ、毀誉褒貶の心を去って心静かに沈黙でき、心満たされる。心が満たされればどこに住もうと平気になる。何の心配も動揺もなく、心は確定し、強くなるであろう。いわゆる「腹がすわる」状態になる。腹がすわれば信愛は強まり、常に神とともに生きているという宗教的信念にもなる。

⑥<常に念想するもの>「しかし、以上述べた、この正しい甘露（不死）〔の教え〕を念想し、信仰し、私に専念する信者たち、彼らは私にとってこよなく愛しい」(Ye tu dharmyāmṛtam idaṁ yathoktaṁ paryupāsate / śrad-dadhānā mat-paramā bhaktās te'tiva me priyaḥ)¹⁴⁾。甘露のような神の教えを絶えず念じ想うことも Bhakti の重要な側面であるという。常に念じ、想うことによって神から愛されるというのであり、したがって念想の持続はヒンドゥー教徒の宗教生活において欠いてはならないものである。

⑦<愛情をこめるもの>「私は一切の本源である。一切は私から展開する。そう考えて、知者たちは愛情をこめて私を信愛するのである」(Ahaṁ sarvasya prabhavo mattaḥ sarvaṁ pravartate / iti matvā bhajante mām budhā bhāva-samanvitāḥ)¹⁵⁾。「愛情をこめて」信愛することは Bhakti にとって非常に重要な点であるが、人格的な神への人格的な親しさにもとづくものであろう。親しい神に近づくことを熱望する心情の中におこる特色であると考えられる。「ラーマヌジャによれば、bhāva は『特別の心的状態』であり、『私（クリシュナ）を切望する気持』である」¹⁶⁾とされるように人格的で濃厚な愛情表現とかかわる側面である。

⑧<神に入り、合一するもの>「ブラフマンと一体になり、その自己が平安になった人は、悲しまず、期待することもない。彼は万物に対し平等であり、私への最高の信愛を得る」(Brahma-bhūtaḥ prasannātmā na śocati na kāṅkṣati / samah sarveṣu bhūteṣu mad-bhaktiṁ labhate parām)¹⁷⁾。真実の自己（アートマン）がブラフマンと一体になり、その自己が平安になると悲しむこともなく、何かを期待して欲望をふくらすこともなくなる。こうなれば何に対しても平等に接することになり、最高神クリシュナへの最高の信愛を得ることになるという。続いて次のような記述がある。「信愛により彼は真に私を知る。私がいかに広大であるか、私が何者であるかを。かくて真に私を知って、その直後に彼は私に入る」(Bhaktiā mām abhijānāti yāvān yaś c'asmi tattvataḥ / tato mām tattvato jñātvā viśate tad-anantaram)¹⁸⁾。信愛によって私（クリシュナ）がいかに広大であるか、何者である

かを真に知るといふ。信愛によって本当の智慧を得たとき、その人はクリシュナに入る、すなわち合一し、一体となるというのである。信愛は神に「入る」「合一する」「一体となる」要素をもつというのである。

以上、Bhaktiの主な使用法について検討してみたが、Bhaktiすなわち信愛は、「ひたむきな」信仰であり、その「ひたむきさ」とともに「智慧と表裏したもの」である。また「強固な信念に」もとづき、さらには「清浄な」ものであり、常に心を集中し「念想する」ことによって「心が確定し」安定感を保ち、同時に「愛情がこめられた」暖かなものでもあり、ついには「神に入り、合一する」ものとなる。

ちなみに同じインドに生まれた宗教である仏教とは共通点も多いが、たとえば神と合一するというような点では、仏に「成る」べき仏教とは相違があると言わざるを得ない。

(2) Bhaktiの対象

では、次にBhaktiの対象となる神(クリシュナ)とはどんな存在であるかを検討してみる。

クリシュナはアルジュナに自分を信愛すれば、自分を知り自分と合一し一体化すると説くが、その自分の物質的原理は地・水・火・風・虚空・思考器官・根源的思惟機能・自我意識の八つであるとする。これは低次の本性であり、これとは別の高次の本性ももっていると説く。「これは低次のものである。だが私にはそれとは別の、^{ジョーヴァ}生命(霊我)である高次の本性(精神的原理)があることを知れ。それにより世界は維持されている」(Apar'eyam itas tv anyāṁ prakṛtiṁ viddhi me parāṁ / jiva-bhūtāṁ mahā-bāho yay'edaṁ dhāryate jagat)¹⁹⁾。高次の本性である精神的原理によって世界は維持されているというのである。これによってヒンドゥー教の神は世界を「維持する」神であることがわかる。

次に「万物はこれに由来すると理解せよ。私は全世界の本源であり終末である」(Etap-yonini bhūtāni sarvāṇi'ty upadhāraya / ahaṁ kṛtsnasya jagataḥ prabhavaḥ pralayas tathā)²⁰⁾。すべてのものはクリシュナの本性に由来し、クリシュナは全世界の本源であり終末であるという。世界のあらゆるものはこの神から生じ、この神に帰入するというのである。さらにクリシュナは「私を万物の永遠の種子であると知れ」(Bijaṁ mām sarva-bhūtānāṁ viddhi Pārtha sanātanam)²¹⁾ともうたう。すべてのものは神を種子として生まれたものであるとされるのである。ということは被造物の一つ一つはクリシュナの肉体の一部分であるとも言えるし、どんな被造物にもクリシュナの高次の本性である精神的原理が宿り、それが個物の中心になる。しかしこれが物質的なものと結びついた場合は輪廻

を続けることとなるのである。いずれにせよ神はすべての「本源」であり「終末」であり「万物の永遠の種子」であることがわかる。

次に「まさに彼らへの憐愍のために、私は個物の心に宿り、輝く知識の灯火により、無知から生ずる闇を滅ぼす」(Teṣāṁ ev'ānukamp'ārtham ahaṁ ajñāna-jam tamaḥ / nāśayāmy ātma-bhāva-stho jñāna-dīpena bhāsvatā)²²⁾とうたわれるように、神は信愛する人を憐愍し、一人ひとりの心に宿るという。人格的な働きかけが濃厚である。この点は次のような表現を見れば明らかであろう。「私に意を向け、私を信愛せよ。私を供養し、私を礼拝せよ。あなたはまさに私に至るであろう。私は必ずそうなると約束する。あなたは私にとって愛しいから」(Man-manā bhava mad-bhakto mad-yāji mām namas-kuru / mām ev'ai-śyasi satyaṁ te pratijāne priyo'si me)²³⁾。神は信愛する人と「約束する」のである。しかも「必ずそうなると約束する」というのである。濃厚な人格性をもった神であることがわかる。

以上の諸点から、Bhaktiの対象である神は高次の本性をもち、世界を維持する存在であり、また世界の本源であり終末である。と同時に万物の種子である。さらには信愛する者を憐愍し、愛しいがゆえに人間との「約束」を堅く守るといった人格性の濃厚な存在でもある、と言える。

(3) 人間観

ギーターでは、人間は三つの構成要素(グナ)から構成されているとされる。純質(サットヴァ)、激質(ラジャス)、暗質(タマス)であるが、この三つの要素の配合によって個人の本性が決まるといわれる。この点については次のように表現されている。「純質、激質、暗質という、プラクリティ(根本原質)から生ずる諸要素は、不変の主体(個我)を身体において束縛する」(Sattvaṁ rajas tama iti guṇāḥ prakṛti-sambhavāḥ / nibadhnanti mahā-bāho dehe dehinam avyayam)²⁴⁾。

この中で最も善い性質である純質が優勢な人間は、正しい知識をもった「神的な人」とされる。これに対し激質や暗質が優勢な人は阿修羅的な人である。そして「純質から知識が生じ、激質から食欲が生ずる。暗質から怠慢と迷妄が生じ、また無知が生ずる」(Sattvāt saṁjāyate jñānaṁ rajaso lobha eva ca / pramāda-mohau tamaso bhava to'jñānam eva ca)²⁵⁾とうたわれる。さらに次のように説かれる。「純質に依存する者は上方に行き、激質性の者は中間に止まり、最低の要素の活動に依存する暗質性の者は下方に行く」(Ūrdhvaṁ gacchanti sattva-sthā madhye tiṣṭhanti rajasāḥ / jaghanya-guṇa-vṛtti-sthā adho gacchanti tāmasāḥ)²⁶⁾。

これが現実の人間の姿であるが、アルジュナはこの三要素をどのようにしたら超越できるのかをたずねる。すると次のような答えが返ってくる。「不動なる信愛のヨーガにより私に奉仕する人は、これらの諸要素を超越して、ブラフマンと「一体に」なることができる」(Mām ca yo'vyabhicāreṇa bhakti-yogena sevate / sa guṇān samatity'-aitān brahma-bhūyāya kalpate)²⁷⁾。不動の信愛は一気に三要素を超越させるというのである。いかに信愛が重視されているかを物語っていると言えよう。さらにこの信愛は、純質の善人になろうとしてもなれない極悪人すら救い上げるといふ。「たとい極悪人であっても、ひたすら私を信愛するならば、彼はまさしく善人であるとみなさるべきである。彼は正しく決意した人であるから」(Api cet sudurācāro bhajate mām ananya-bhāk / sādhu eva sa mantavyaḥ samyag vyavasito hi saḥ)²⁸⁾。

ここにギーターにおける人間観とその救いの特徴がよく表わされていると思える。

(4) Bhakti とわざ

人間は行為しないでは生きていけない。この点についてギーターでは次のようにうたわれる。「実に、一瞬の間でも行為をしない人は誰もいない。というのは、すべての人は、ブラクリティ（根本原質）から生じる要素により、否応なく行為をさせられるから」(Na hi kaścit kṣaṇam api jātu tiṣṭhaty akarma-kṛt kāryate hy avaśaḥ karma sarvaḥ praktijair guṇaiḥ)²⁹⁾。すでに述べたように、ブラクリティは純質、激質、暗質からなっていたが、その三つの組み合わせによって行為も定められるという。

ではどのようにわざをなせばよいのか。この点については次のように歌われる。「諸行為をブラフマンに委ね、執着を捨てて行為する人は、罪惡により汚されない。蓮の葉が水に汚されないように」(Brahmaṇy ādhāya karmāṇi saṅgaṁ tyaktvā karoti yaḥ / lipyate na sa pāpena padma-patram iv'ambhasā)³⁰⁾。行為をブラフマンにゆだねるとは、行為の結果を神にゆだねる、つまり結果を人間が自分で心配するのではなく、神にゆだね、執着を離れるということである。このことはあらゆる行為を神に捧げる祭祀として行なうことでもある。ギーターは、このことを次のようにもうたう。「すべての行為を私のうちに放擲し、自己アートマンに関することを考察して、願望なく、『私のもの』という思いなく、苦熱を離れて戦え」(Mayi sarvaṇi karmāṇi samnyasy'ādhyātma-cetasā / nirāśir nirmamo bhūt-vā yudhyasva vigata-jvaraḥ)³¹⁾。おのれのわざのすべてを神のうちに放擲し、神に捧げることによって、わざはわざであっても単なる人間のわざではなくなる。神に対する捧げものとなる。これは別の面から見ると、Bhakti と一つになったわざでもある。Bhakti がなさせるわざ

であり、それゆえすでに三つの原質を超えたものとなっている。

(5) Bhakti の特質

最後に『バガヴァッド・ギーター』における Bhakti の特質を鮮明にするため、仏教の「信仰」に当たる用語と比較検討したい。

仏教においては「信」あるいは「信心」という語が「信仰」に相当するが、これらの用語はインドのサンスクリット語の漢訳である。そこでサンスクリット語の原意にさかのぼってその意味を考えてみる。

まず仏教文献の中で最も多く使用される語は śraddhā であるとされるが、漢訳では「信、信解、信受、淨信、信心」等と訳され、使用されている。サンスクリット語の語源は「信を置く」というところから発している。

また adhimukti という語があるが、漢訳では「信、信解、信受、明信、信心、深信、勝解」等と訳され、使用されている。サンスクリット語の語源は「対象の上に心を傾ける」というものであった。

次に abhisampratyaya という語があり、漢訳では「信解、深信解、忍可、現前忍許、正信順」等と訳され、使用されている。サンスクリット語の語源は「同意する、認許する」というものであった。

以上から知られることは、これら漢訳の語の中に「解」という字が多いことである。ということは、仏教における「信じる」という行為には知的な要素が強いということである。この点に Bhakti との相違が見られるのではないか。もちろん、すでに考察したように Bhakti も単に熱狂的な面だけをもつ信仰ではなかった。知識、智慧を重要視する知的な面も存在した。しかしそれでもなお Bhakti は、人格的な神への愛情を基幹とする信仰であって、その特質を異にするものである。

さらに仏教には prasāda という語があり、漢訳では「清淨、淨心、心清淨、信心、淨信、敬信、信樂」等と訳され、使用されている。サンスクリット語の語源は「鎮める、淨化する、喜悅する」というところに発している。仏教の信の一面には心を清淨にするという要素がある。心が清淨になれば、法が自ら現れてくるのであり、法がよく解るというのである。また法が解ればいよいよ心は清淨になる。

これに対しギーターでは、たとえば「この無常で不幸な世に生まれたから、私のみを信愛せよ」(anityam asukhaṁ lokam imaṁ prāpya bhajasva mām)³²⁾ とうたわれている。無常で苦しいこの世に生まれてしまったから、ここから解脱するには一心に神を信じ愛せよというのである。仏教ならば無常であることをしっかり自覚し、信によって心を清淨にし、法の現成を待ち、法により自己

を解放し解脱せよ、と教えるであろう。しかしギターでは一心に神のみを信愛し、神と合一することによって解脱せよと説くのである。したがって仏教の「信」と Bhakti は違うものであると考えざるを得ないが、ここにまたギターにおける Bhakti の特質があるとも言える。

2. ヴィヴェーカーナンダにおける Bhakti

1893年、シカゴの世界宗教者会議で博愛主義と普遍主義に立脚したヒンドゥーイズムを主張し、西洋社会に精神的衝撃を与えたヴィヴェーカーナンダ (1863-1902) は、わずか39歳の若さで没したが、インドの宗教的精神を体現し、その行動はヒンドゥー教信仰に動かされたものであった。

よく知られているように、タゴールはロマン・ロランに「インドを知りたいと思われるなら、ヴィヴェーカーナンダを研究しなさい」³³⁾と述べたし、ガンディーは「私はスワミ・ヴィヴェーカーナンダの著作を全部、熟読した。そして読み終わったあと、私がわが国に対して抱いていた愛情は千倍も深くなった」³⁴⁾と言っている。またヴィヴェーカーナンダの代表的な著作に『バクティ・ヨーガ』(Bhakti-Yoga) という著書があることから、彼にヒンドゥー教における Bhakti の意味を問うことは意味のあることであると考えられる。以下検討してみたい。

まず彼はバクティ・ヨーガについて次のように定義している。「バクティ・ヨーガは誠実に、純粋に、主を探求することである。愛においては始まり、愛において続き、愛において終わる探求である。一瞬の神へのはげしい愛の狂気は、われわれに永遠の自由をもたらすのだ」(Bhakti-Yoga is a real, genuine search after the Lord, a search beginning, continuing, and ending in Love. One single moment of the madness of extreme love to God brings us eternal freedom.)³⁵⁾ Bhakti は愛の要素を色濃くもっていることは周知のことであるが、今私はこの「狂気」(madness) という点に留意したい。一面で「誠実に、純粋に」と言いながら「狂気」というような表現をすることは、一見矛盾するような印象を与えるが、この点はどう考えるべきか。こう言いながら、たとえば智慧と Bhakti の関係について「智慧 (ジュニヤーナ) と信愛 (バクティ) との間には、実際には人々が時々想像するほど大きな相違はないのである」(There is not really so much difference between knowledge (Jnana) and love (Bhakti) as people sometimes imagine.)³⁶⁾と述べている。このことから「狂気」ではあっても狂信的なものでないことは察せられるが、いずれにしてもこのような問題を念頭におきながら、以下いくつかの側面から彼のいう

Bhakti について検討してみる。

(1) Bhakti の使用法

彼はこの著の中で、Bhakti を love と言い換えることがよくあるが、Bhakti あるいは love についてさまざまに表現している。

①<取引の関係には立たない>「信愛は報酬というものを求めない。信愛は常に信愛のために愛するのだ。バクタは愛さずにはいられないから、愛するのである」(Love knows no reward. Love is always for love's sake. The Bhakta loves because he cannot help loving.)³⁷⁾ 信愛は取引の関係には立たず、報酬も求めないという。報酬を求めるところに真の信愛はないからである。さらに具体的に「君自身を常に与える者の立場におきなさい。君の愛を神に捧げ、神からの報酬であっても何も求めてはならない」(let your position be always that of the giver; give your love unto God, but do not ask anything even in return from Him.)³⁸⁾と述べている。

②<恐怖心から生じるものではない>「信愛は恐れを知らない。恐怖心から神を愛する者は、人間として未発達な、人間の中では最も低段階の者たちだ」(love knows no fear. Those that love God through fear are the lowest of human beings, quite undeveloped as men.)³⁹⁾ 恐怖を免れようとして無理に神を信じようとする宗教もあるが、信愛はこのような恐れとは無関係であるという。彼は次のような比喻をする。若い母親は、犬にほえられても逃げるが、もしその母親がわが子を連れていれば、たとえ相手がライオンであっても決して逃げないだろう。「信愛はあらゆる恐怖を克服する」(Love conquers all fear.)⁴⁰⁾からである。

③<相対的なものではない>「信愛は競争者を知らない」(love knows no rival.)。その理由は「そこには愛する者の最高の理想が常に具現されているからである。真の信愛は、愛の対象がわれわれにとって自身の最高の理想となるまでは生まれて来ない」(for in it is always embodied the lover's highest ideal. True love never comes until the object of our love becomes to us our highest ideal.)⁴¹⁾からである。相対的な対象ではないから、相対的な信愛ではない。

④<静寂なもの>「この信愛が理解される最も弱い形態は、人々が静寂 (シャーンタ) と呼ぶものである」(The lowest form in which this love is apprehended is what they call the peaceful—the Shānta.)⁴²⁾ Bhakty がまだ火のように激しく燃え上がっていない段階では静寂なものという特徴をもつ、という。「われわれは世界の中にゆっくりと動くことを好む人々と、竜巻のように来たと思ったら行ってしまうような人々を見る。シャーンタ・バク

タは落ち着いた静寂で穏やかものである」(We see some people in the world who like to move on slowly, and others who come and go like the whirlwind. The Shānta-Bhakta is calm, peaceful, gentle.)⁴³⁾。Bhakti は高い段階では火のように激しくなるが、その基盤にこのような静寂な状態が存在するという点は、ヴィヴェーカーナンダの Bhakti 考察のポイントになるだろう。

⑤<奉仕の精神が生まれる>「その次に高い型は、ダーシャすなわち奉仕の精神のそれである」(The next higher type is that of Dāśya, i.e. servantship;) ⁴⁴⁾。自分は神に仕えるものであると信じる時、この形態の信愛が生まれるという。「主人への忠実な奉仕に徹するのが彼の理想である」(The attachment of the faithful servant unto the master is his ideal.)⁴⁵⁾

⑥<神との友情に満ちたもの>「信愛の次の型は、サキヤすなわち友情——『おんみはわれわれの最愛の友です』というものである」(The next type of love is Sakhya, friendship —“Thou art our beloved friend.”)⁴⁶⁾。彼によれば、信愛する人間と神との間には相互に平等の愛が出入りしており、それゆえ神はわれわれの心の友であるという。だから神はわれわれの遊び友達でもあり、この世界を相手にしてスポーツをしておられるとも例えられている。次の文章に具体的である。「全宇宙は結局、神にとっては大きな一つの心地よい楽しみにちがいない。もしも君が貧乏であれば、それを楽しみとして満喫しなさい。もしも君が豊かであれば、豊かであることを満喫しなさい。もしも危険が迫って来るなら、それもまたよい楽しみである。もしも幸せがやって来るなら、もっと楽しい。この世はまさに遊び場なのだ、ここでわれわれは、ゲームをし十分に楽しむのだ。神はわれわれといつも遊んでおられ、われわれはまた神と遊んでいるのだ。神はわれわれの永遠の遊び仲間である」(The whole universe must after all be a big piece of pleasing fun to Him. If you are poor, enjoy that as fun; if you are rich, enjoy the fun of being rich; if dangers come, it is also good fun; if happiness comes, there is more good fun. The world is just a playground, and we are here having good fun, having a game, and God is with us playing all the while, and we are with Him playing. God is our eternal playmate.)⁴⁷⁾

⑦<神を子供として愛する>次に、他の宗教から見れば非常にユニークに思える見方が示される。「次はワーツサリヤとして知られているもので、神をわれわれの父としてではなく自分の子供として信愛することである」(The next is what is known as Vātsalya, loving God not as our Father but as our Child.)⁴⁸⁾。この見方について彼自身も次のように言う。「これは一風変わって見えるだろ

う。しかしそれは、われわれに神の概念からあらゆる力の観念を取り去ることを可能にする一つの訓練なのだ。力の観念は、怖れの念をもたらす。愛の中に怖れがあるべきではないのである」(This may look peculiar, but it is a discipline to enable us to detach all ideas of power from the concept of God. The idea of power brings with it awe. There should be no awe in love.)⁴⁹⁾。この愛について彼は「わが子のうちのたった一人のためにでも彼らは千の命を犠牲にするだろう。それゆえ、神は子供として愛されるのである。…マホメット教徒には、神を子供として見るこの思想は不可能であるのだ」(A thousand lives they will sacrifice for that one child of theirs, and, therefore, God is loved as a child.… Mohammedans it is impossible to have this idea of God as a child;)⁵⁰⁾と説明するが、父性的要素の強いイスラム教との違いが顕著であるし、ここにヒンドゥー教の Bhaktyi の重要な要素の一つがあると考えられる。ちなみに玉城康四郎氏はその点を仏教と比較し、次のように指摘しておられる。「ヴィヴェーカーナンダのいうこうした考え方は、仏教にもないわけではない。たとえば『大無量寿経』に、仏の衆生に対する関係を、『純孝の子の、父母を愛敬するがごとし。もろもろの衆生において視ること、自己のごとくす。』といわれている。すなわち、仏が子で、衆生が父母となっている。しかしここでは、衆生が仏に向かう方向ではなく、逆に、子である仏が父母である衆生に働きかける関係が強調されている」⁵¹⁾。仏教とヒンドゥー教の類似点と相違点への問題提起がなされているが、留意すべきであろう。

⑧<甘美で狂おしいもの>「ここにもう一つ、信愛の神聖な理想についての人間的な表現がある。それはマドゥラ、甘美と呼ばれるもので、このような表現の中の最高のものだ」(There is one more human representation of the divine ideal of love. It is known as Madhura, sweet, and is the highest of all such representations.)⁵²⁾。甘美(sweet)という要素は珍しく感じられるが、具体的にどのようなものか。「神の愛のこの甘美な表現においては、神はわれわれの夫である。われわれは皆女であって、この世界に男はいない。ただ一人の男がいるだけであって、それは彼すなわちわれわれの最愛の方である。男が女に与える、あるいは女が男に与えるすべての愛は、ここでは主に捧げ尽くされなければならない」(In this sweet representation of divine love God is our husband. We are all women; there are no men in this world; there is but One man, and that is He, our Beloved. All that love which man gives to woman, or woman to man, has here to be given up to the Lord.)⁵³⁾。この信愛の形態は、人間的な愛の最も

強い形である男女相互の愛に基づき、神は人間すべての夫であり、人間はすべて妻であるという関係において湧き起こる信愛である。男女の強い愛が神に向けられることによって愛は真の愛となり、信愛となるという。「信愛は正しい目的地に到着しなければならない。真に無限の愛の海である神のもとに行かねばならないのだ」(Love must get to its right destination, it must go unto Him who is really the infinite ocean of love.)⁵⁴⁾。このような境地が可能になった時、Bhakti に生きる人すなわちバクタはおのれを忘れ、おのれを変化させ、愛の狂気は完成されるのである。愛の狂気とは一般の愛を超えることであって、俗なる愛に狂うことではないはずである。ここに Bhakti の意味があると思える。

(2) Bhakti の対象

では次に、ヴィヴェーカーナンダの Bhakti の対象となっている神(イシュワラ)とはどんな存在であるかを検討してみる。

彼にとっては唯一絶対者はブラフマン(Brahman)であったが、バクタにとって「ただ、単一である、あるいは絶対であるブラフマンは、愛され崇拝されるにはあまりにも抽象的であるから、バクタはブラフマンの相対的な面、すなわち最高の支配者であるイシュワラを選ぶのだ」(only the Brahman, as unity or absolute, is too much of an abstraction to be loved and worshipped; so the Bhakta chooses the relative aspect of Brahman, that is, Ishvara, the Supreme Ruler.)⁵⁵⁾。イシュワラ(Ishvara)は自在神とも言われるが、ブラフマンと別のものではないし、ブラフマンを人間の心によって可能な限り読み取り、理解したものである。したがってイシュワラは人間に対する絶対者の最高度の表現とも言えるだろう。「イシュワラは絶対実在の最高の現われである。換言すれば人間の心によって読み取られ(理解され)得る絶対なる者の最高のものである」(Ishvara is the highest manifestation of the Absolute Reality, or in other words, the highest possible reading of the Absolute by the human mind.)⁵⁶⁾とも言われる。

宇宙はこのイシュワラによって生まれるもの(the birth)、続くもの(continuation)、崩壊するもの(dissolution)であるという。イシュワラは、不滅なるもの(the Eternal)、純粋なるもの(the Pure)、永遠に自由なるもの(the Ever-Free)、全能(the Almighty)で全知(the All-Knowing)なるもの、慈悲そのもの(All-Merciful)、すべての教師たちの師(the Teacher of all teachers)であるとも言われ、「その上に『彼すなわち主は、それ自身の本性が、表現し得ないような愛であられる』(and above all, Sa Ishvarah anirvachaniya-premasvarupah

—“He the Lord is, of His own nature, inexpressible Love.”)⁵⁷⁾とされる。このような点から見れば、イシュワラは人格神のようでもあるが、ブラフマンであることも考えれば、人格神であると同時に非人格的な神であるとも言わなければならない。しかし究極においては同一のものである。

(3) 人間観

では次に、ヴィヴェーカーナンダにおいては人間はどのようなものとして考えられているのであろうか。「人間の顔の、空の、星の、月の美しさとは何であるのか。それはただ真の、すべてを抱擁する神の美しさの部分的な把握にすぎない」(What is the beauty in the human face, in the sky, in the stars, and in the moon? It is only the partial apprehension of the real all-embracing divine beauty.)⁵⁸⁾。この文から察せられることは、神と人間の間に断絶されてはいないことである。あらゆる存在は神によって抱擁されている存在である。人間を神に背反した悪人であると位置づける発想には基づいていない。「『彼が輝き、すべてのものが輝く。あらゆるものが輝くのは、神の光によってである』。君たちの小さな個性のすべてを、すぐに忘れさせてしまう Bhakti のこの高い境地をとらえなさい。この世の小さなものにしがみつく利己的な執着から、自分を解放しなさい」(“He shining, everything shines. It is through His light that all things shine.” Take this high position of Bhakti which makes you forget at once all your little personalities. Take yourself away from all the world's little selfish clings.)⁵⁹⁾

さらに彼は具体的に次のような言い方もする。「『おお、最愛の人よ、かつて夫のために夫を愛した者がいたろうか。夫が愛されるのは、夫の内にアートマン、主がおられるからだ』。愛する妻たちがそのことを知っていようと知っていまいと。それは本当なのだ」(“None, O beloved, ever loved the husband for the husband's sake; it is the Âtman, the Lord who is within, for whose sake the husband is loved.” Loving wives may know this or they may not; it is true all the same.)⁶⁰⁾。神が人間の中にどのように働きかけているかがよくわかる。この点についてさらに次のよう述べられている。「主は強力な磁石であり、われわれは皆鉄のけずり屑のようなものだ。われわれは常に主によって引きつけられ、われわれのすべてが神のもとに到達しようともがいているのである。…人生における大変な苦闘と戦いのすべては、われわれを主に近づかせ、ついには主と一体にならせるためのものなのだ」(The Lord is the great magnet, and we are all like iron filings; we are being constantly attracted by Him, and all of us are struggling to reach Him. … All the tremendous

struggling and fighting in life is intended to make us go to Him ultimately and be one with Him.)⁶¹⁾ 神と人間の関係が磁石と鉄屑の関係のようにとらえられ、常に引きつけ合うものとされるが、このような関係は一部の自然宗教を除いてほとんどの宗教に見られる要素であろう。ただこの引きつけ合い方はきわめて多様であるが、今留意しておきたい点は「主（神）と一体に」（one with Him）ならせるという点である。神と一体になるという形態は他の宗教にも見られるが、ヴィヴェーカーナンダ、さらにはヒンドゥー教において特に顕著であることを確認しておきたい。

(4) Bhakti とわざ

「『あらゆるものは主のものであり、主は私の愛人。私は主を信愛する』とバクタは言う。こうしてあらゆるものはバクタにとっては神聖なものとなる。というのは、すべてのものは主のものだから。すべての人間は主の子供、主の体、主の現われである」（“Everything is His and He is my Lover; I love Him,” says the Bhakta. In this way everything becomes sacred to the Bhakta, because all things are His. All are His children, His body, His manifestation.)⁶²⁾ 神は私の愛人であり、すべては彼のもの、すべては神の子供、神の体、神の現われであるという信愛の関係において、では人間の「わざ」はどのようなものとして考えられるか。

「人間はもはや人とは見られず、神としてしか見られない。動物はもはや動物とは見られず、神としてしか見られない。虎であっても、もはや虎ではなく、神の現われなのだ。こうしてバクティの熱烈な状態においては、崇拝はあらゆる人、あらゆる生命、そしてあらゆる存在に捧げられるのである」（man is seen no more as man, but only as God; the animal is seen no more as animal, but as God; even the tiger is no more a tiger, but a manifestation of God. Thus, in this intense state of Bhakti, worship is offered to every one, to every life, and to every being.)⁶³⁾ 人も獣も、そして虎さえも Bhakti の状態においては神と見えるというのである。であればあらゆるものに礼拝は捧げられ、信愛の状態にいる人にとって、あえてなすべき人間のわざはなくなると言えよう。おのれが放棄され、おのれは神にまかせられ、あらゆるものはそのまま受け入れられ、あらゆることが神の働きかけであると喜び受け取ることができるようになる。たとえば「この種の熱烈な、心を奪ってしまうような愛の結果として、完全に自己を放棄し任せ切る、何ひとつわれわれにとって悪いことはおこらないという信念をもつ、すなわちアブラーティクリヤが生じる。この時、信愛する魂は、苦痛がやって来たら、『ようこそ、苦痛よ』と言

うことができるようになる。不幸が来れば、『ようこそ不幸よ、君もやはり最愛の方の使いだ』とすることができる」（As a result of this kind of intense all-absorbing love, comes the feeling of perfect self-surrender, the conviction that nothing that happens is against us, Aprâtikulya. Then the loving soul is able to say, if pain comes, “Welcome pain.” If misery comes, it will say, “Welcome misery, you are also from the Beloved.”)⁶⁴⁾ このような態度となるのである。信愛する神に任せ切り、信仰に生きる人間にとってはもはやわざ、行為は必要がなくなる。「このような、愛そのものである神の意志に任せ切ることができるようになることは、まことに英雄的な行為のあらゆる栄光にもまさって価値ある、修行の成果なのだ」（this kind of uncomplaining resignation to the will of God, who is all love, is indeed a worthier acquisition than all the glory of grand and heroic performances.)⁶⁵⁾ このような信愛は、いわば他力型の信仰とも言える特色をおびることになる。

(5) Bhakti の特質

ヴィヴェーカーナンダの Bhakti については、すでに(1)で指摘したように、①取引の関係には立たない、②恐怖心から生じるものではない、③相対的なものではない、④静寂なもの、⑤奉仕の精神が生まれる、⑥神との友情に満ちたもの、⑦神を子供として愛する、⑧甘美で狂おしいもの、などの要素があった。しかし最後に問題にしたい点は、この「④寂静なもの」という要素をもつと同時に「⑧甘美で狂おしいもの」という要素をもつという、一見矛盾するような二面をもつという点である。この点はヴィヴェーカーナンダについての考察の最初のところでも提起した問題である。すなわち「愛の狂気」と冷静な「智慧」の問題である。このような矛盾するとき二面がいかにして両立し得るかの問題について最後に考えてみたい。

「バクタにとって、実はこの高い智慧と彼の高い信愛（パラ・バクティ）の間には区別はないのである」（and to the Bhakta there is really no difference between this higher knowledge and his higher love (Parâ-Bhakti).)⁶⁶⁾ とされるが、なぜか。

「高い智慧はこのようにはっきりとブラフマンの智慧であると示されている。そしてデヴィ・バーガヴァタはわれわれに、さらに高い愛（パラ・バクティ）について次のような定義を与えている、『一つの器からほかの器に移される油が途切れない線となって落ちるように、心が途切れない流れの中に主について思う時、われわれはパラ・バクティすなわち至高の信愛と呼ばれるものを抱く』と」（The higher knowledge is thus clearly shown

to be the knowledge of the Brahman; and the *Devi-Bhâgavata* gives us the following definition of the higher love (Para-Bhakti): “As oil poured from one vessel to another falls in an unbroken line, so, when the mind in an unbroken stream thinks of the Lord, we have what is called Para-Bhakti or supreme love.”⁶⁷⁾ 高い信愛は不断に主を思うとき、至高の信愛を抱くことになる、という。

「このように、精神と心が乱されず、つねにともにいたいと愛情をもってしっかりと主に向かっている状態が、本当に人間の神への愛の最高の現われなのだ。…そのような人は自分自身の中に、神への思い以外のものが入る余地を与えず、魂は誰も犯すことができないほど清らかとなる」(This kind of undisturbed and ever-steady direction of the mind and heart to the Lord with an inseparable attachment is indeed the highest manifestation of man's love to God. …He will give no room in himself to thoughts other than those of God, and his soul will be unconquerably pure.)⁶⁸⁾ 常に堅く神に向かっている状態においては、その人の魂は清らかになるという。この時、Bhaktiは成就し、智慧はその魂に満ちることになる、と言い得る。信愛によって引き上げられた魂は、苦勞することなく神によって難解な智慧のヨーガを与えられるのである。智慧のヨーガは哲学的で実行がきわめて困難である。これに対し信愛は容易に、自然に、その境地に達することができる。もちろんこれが我欲に犯されると狂信的になることがある。しかしそれが正しく導かれ、狂おしい激しさが常に神のことを思う激しさとなれば、絶えず知慧が注ぎこまれることとなる。熱い反面、その熱さが喜びになり、熱さの中であってその魂は寂静の境地に立ち得、矛盾するとき両面は同時に成立し得ることとなる、と考えられる。これがヴィヴェーカーナンダの言う Bhakti の特質でもある。

以上、『バガヴァッド・ギーター』の Bhakti とヴィヴェーカーナンダにおける Bhakti について考察し、ヒンドゥー教における Bhakti の一面を導出してみた。今後はこれを世界の他の宗教の信仰と比較検討し、さらにその特質を鮮明にしたいと考えている。

註

- 1) 宇野惇訳「バガヴァッド・ギーター」(抄訳)『バラモン教典・原始仏典』(世界の名著1、中央公論新社、1979)、辻直四郎訳『バガヴァッド・ギーター』(講談社、1980)では「誠信」と訳されている。
- 2) 服部正明訳「バガヴァッド・ギーター」『ヴェーダ・アヴェスター』(世界古典文学全集3、筑摩書房、1967)では「献身的愛」と訳されている。
- 3) 上村勝彦『バガヴァッド・ギーター』(岩波文庫、1992)では

「信愛」と訳されている。

- 4) 中村元『インド思想史』(岩波全書213、1968)103頁
- 5) 以下、上記の上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』および Śrīmad Bhagavad Gītā (BY Swami Tapasyananda, Sri Ramakrishna Math, Madras) より引用する。Gītā, 1-45
- 6) ibid. 2-33
- 7) ibid. 11-54
- 8) ibid. 7-16
- 9) ibid. 7-17
- 10) ibid. 7-28
- 11) ibid. 12-14
- 12) ibid. 12-16
- 13) ibid. 12-19
- 14) ibid. 12-20
- 15) ibid. 10-8
- 16) 上記上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』訳注より。189頁
- 17) Gītā, 18-54
- 18) ibid. 18-55
- 19) ibid. 7-5
- 20) ibid. 7-6
- 21) ibid. 7-10
- 22) ibid. 10-11
- 23) ibid. 18-65
- 24) ibid. 14-5
- 25) ibid. 14-17
- 26) ibid. 14-18
- 27) ibid. 14-26
- 28) ibid. 9-30
- 29) ibid. 3-5
- 30) ibid. 5-10
- 31) ibid. 3-30
- 32) ibid. 9-33
- 33) 「スワミ・ヴィヴェーカーナンダについて世界の思想家たちが語ったこと」(日本ヴェーダーンタ協会、書籍カタログ)より。
- 34) 同上
- 35) Swami Vivekananda: Bhakti Yoga, Advaita Ashrama, Calcutta, 2001, p. 3
- 36) ibid., p. 4
- 37) ibid., p. 94
- 38) ibid., p. 94
- 39) ibid., p. 94
- 40) ibid., p. 95
- 41) ibid., p. 95-96
- 42) ibid., p. 101
- 43) ibid., p. 102
- 44) ibid., p. 102
- 45) ibid., p. 102
- 46) ibid., p. 102
- 47) ibid., p. 103
- 48) ibid., p. 104
- 49) ibid., p. 104
- 50) ibid., p. 105
- 51) 玉城康四郎『近代インド思想の形成』(東京大学出版会、1965) p. 265-266
- 52) Bhakti Yoga, p. 106
- 53) ibid., p. 106
- 54) ibid., p. 107
- 55) ibid., p. 11
- 56) ibid., p. 12
- 57) ibid., p. 11

- 58) *ibid.*, p. 71
- 59) *ibid.*, p. 71
- 60) *ibid.*, p. 73
- 61) *ibid.*, p. 73
- 62) *ibid.*, p. 84
- 63) *ibid.*, p. 85

- 64) *ibid.*, p. 85
- 65) *ibid.*, p. 86
- 66) *ibid.*, p. 89
- 67) *ibid.*, p. 89-90
- 68) *ibid.*, p. 90